

美しい森林づくり全国推進会議 社団法人日本将棋連盟が担う 美しい森林づくりへの活動

「美しい森林づくり全国推進会議」の構成団体で、「将棋道の普及・発展を図り、併せて国際親善の一翼を担い、人類文化の向上に寄与すること」を謳っている社団法人日本将棋連盟。今回、普及推進部普及開発課の谷康典氏におもな活動や「美しい森林づくり全国推進会議」での役割などを伺いました。

将棋に欠かせないカヤの木とツゲの木に感謝の想いをこめて

千年以上の長きにわたり、愛され続けている将棋は、盤も駒も駒台も木で作られ、森林とは切っても切り離せない関係にあります。プロ棋士が使う駒に使用されているのが、栢植の木。駒に最も適している材質のツゲは伊豆七島にある原生林でおおわれた御蔵島でしか採取することができないため、日本将棋連盟では感謝の気持ちをこめて、この島で定期的に行事を行っています。

「御蔵島のツゲを使った駒は最高級と言われ、対局に使われています。毎年、五月の第二土曜・日曜日にプロ棋士が当地を訪れ、地元の子供たちに対し、将棋の指導を行なっています。役場の人の案内で山に登って実際に天然のツゲの木を見に行きます」（谷康典氏）
一方、将棋盤には樅の木を用いるのが最も



普及推進部 普及開発課の谷康典氏

適しています。硬すぎず、柔らかすぎず、弾力があり、駒を指したときの感触や音の響きが素晴らしい、大きなカヤから切り出した盤は、美しい木目が特長。棋士がまっすぐな心で対局する棋道のシンボルとしても長年にわたり、愛用されています。

「安い盤や駒は外材を使っているものもありますが、プロ棋士が対局で使うのはやはり国産材を使ったカヤの盤とツゲの駒です。硬すぎる盤だと駒が痛んでしまうんです。実際カヤの盤にツゲの駒で指した時の音はよく響き、弾力があるので駒に優しく、盤・駒の相



「みどりの感謝祭」では女流棋士による指導対局を実施



性が良いので将棋に適していると言われています」(谷康典氏)



社団法人 日本将棋連盟

1924年9月8日に東京の棋士が団結し、「東京将棋連盟」を結成。1927年、関西の棋士も合流し「日本将棋連盟」となり、その後1936年に「将棋大成会」と改称するが、戦後の1946年、再び名称を「日本将棋連盟」に。1949年7月29日、社団法人となり、2005年には創立81周年を迎えた。

美しい森林を守るとともに 将棋を若い世代に伝えていく

山村に多く植えられていたカヤの木は樹高二〇m、幹の周り三m以上にも育ちますが、そこまで大きくなるためには数百年の歳月が必要とされ、特に、将棋盤として完成するまでには五〇〇年もの歳月がかかると言われていいます。今でも天然のカヤが残っている神奈川県箱根町において、カヤがはぐくんできた囲碁や将棋の文化をさらに広げ、併せて、カヤの植樹祭を通じて森林の再生を行う「盤樹の森」事業を二〇〇五年にスタートしました。「この事業は今回で四回目となりますが、山口昇土箱根町長、囲碁の梅沢由香里女流棋聖、

- 1：会長の米長邦雄氏は第二回「美しい森林づくり全国推進会議」に参加
- 2：「箱根新能記念縁台将棋の会」の様子：「盤樹の森」実行委員会提供
- 3：「盤樹の森」で行なわれたカヤの植樹：「盤樹の森」実行委員会提供

将棋の瀬川晶司四段らが参加してカヤの木の植樹祭を行なっています。その他、東京都東日本都市対抗将棋大会や全国大学対抗将棋大会も行なっています。昨年は箱根関所において瀬川四段が学生たちに対し、多面指し指導対局が行なわれました。今回は八月八日に箱根神社において「箱根新能記念縁台将棋の会」が行なわれました」(谷康典氏)

日本将棋連盟の会長である米長邦雄氏は「美しい森林づくり全国推進会議」の設立発起人でもあります。五月一日、一日に日比谷公園で開催された「みどりの感謝祭」にも参加。ブースを出店し、緑の中で指導対局を行う光景が見られました。また、六月に行われた第二回「美しい森林づくり全国推進会議」では会長自らが壇上に立ち、森林づくりへの取り組みについての考えを述べられました。

「会長は次世代育成に力を入れております。小・中学生の大会が増えているのもそのひとつです。日本の伝統文化である「将棋」をいかに子供たちに伝えていくかを常に考えています」(谷康典氏)

植樹したカヤの木がいずれ盤になり、若い世代に受け継がれていく。将棋は伝えたい木の文化でもあるのです。